



Title	北海道大学の初級フランス語のクラスについての観察結果と考察
Author(s)	ミッシェル, パルフェティ
Citation	高等教育ジャーナル, 9, 16-21
Issue Date	2001
DOI	10.14943/J.HighEdu.9.16
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29675
Type	bulletin (article)
File Information	9_P16-21.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学の初級フランス語のクラスについての 観察結果と考察

ミッシェル バルフェティ*

ペイルー語学学校 (フランス, モンプリエ)

Observation et réflexion sur la classe de français niveau débutant
à l'Université du Hokkaido

Michèle Barféty*

L'Institut Linguistique du Peyrou, Montpellier, France

Abstract — The necessity to teach foreign languages is beyond doubt in modern education systems. Yet the clear-cut definitions of the related objectives and most efficient methods to achieve the educational goals still remain to be defined. The first question that any educational system should pose beforehand appears to be “ a language – yes, but to what end ? ”. Several answers could be pertinent. The first one is “ to communicate ”, the second one is “ to broaden the scope of thinking by examining a different structural system ”, the third one is “ to enrich the general knowledge of human culture ”. Clearly, it is possible to provide more answers. While all those reasons are always implicit and relevant in the language education, the European systems of today tend to high-light the function of oral and written communication. What about the Japanese system ? After more than a decade of experience of teaching French to foreigners in France I had an opportunity to be present at several French courses taught to Japanese students at the Hokudai. Here, I am making an attempt to summarize my experience by highlighting what I believe are the most important differences between the two systems.

(Received on February 20, 2000)

<紹介> 南フランスの語学学校で外国人にフランス語を教える教師である Michèle Barféty さんが、言語文化国際コミュニケーション系の客員研究員としてフランスから来日されたのは1999年8月である。以後、大変短い滞在ではあったが、土地柄日ごろからスペイン語圏の学習者と親密なコンタクトのある彼女は、日本の大学のフランス語教育にも多大な関心を示し、後期10月の一ヶ月の間に、本学1年生のフランス語の授業を10コマ見学された。以下にご紹介するレポートはその授業観察から生まれた率直な感想である。

受け入れ担当教官・言語文化部 (フランス語教育系) 長野 督

*) Correspondence: dmitri@univ-st-etienne.fr

0. 序章

北大では、すべての学生が、1学年次に2セメスター、そして過半数以上の学生が2学年次に1セメスター、つまり第2外語を3セメスター学んでいる。週に最低2コマ3時間、二人の教師が担当する授業に出席する。私が見学したクラスは、28人から35人くらいの学生で構成されていた。

この必修のクラスが終わると、ほとんどの学生は自分の専門の学習に専念するが、語学学習をもう少し深めたいと望むものもいくつかいて、フランス語に関しては、それは文学部と法学部の学生が多いようだ。

いずれにしても、3セメスターの必修期間には、それなりの目標と、それに到達する方法がなくてはならない。それに関しては、大半の学生が3セメスター以上の学習をしないことが前提だが、いくらかはその基礎を以後の学習に用いるであろうことを考慮に入れなくてはならない。

1. 教科書

フランス語学習のための日本製の教科書は非常に数多い。私が見学したクラスでは、すべての教師が『パリ東京初飛行』と『Bonjour, ABC』という日本の教科書を使っていた^(注1)。これらの教科書は、おそらくフランスの教科書よりも、プログラムの要求に的確に応えるものなのだろう。

一見して、初学者向けのフランスの教科書よりも薄い日本の教科書では、難しい文法が多く、その応用の練習はずっと少ない。

たとえば、北大でもっとも多く使用されている『パリ東京初飛行』の文法の内容と、レベル1のフランスの教科書(たとえばLe Nouveau sans frontièreやCafé Crème)とを比べた場合、日本の教科書の文法はずっと難しいのがわかる。『パリ東京初飛行』はずっとたくさんの文法事項を扱っている。たとえば、私がメモしたところによれば、大過去、受動態、現在分詞、条件法、仮定文、接続法など、レベル1のフランスの教科書には一般的に出てこないような文法事項を学ぶことになっている。

日本の教科書の巻末には、たいてい、規則動詞と不規則動詞の活用表が載っているが、驚いたことには、初級者向けの教科書であるにも関わらず、口語では

ほとんど用いられず、書き言葉においても3人称でしか残っていないような単純過去があり、さらに驚いたことには、今日ではかなりのフランス人にその存在さえも知られていない接続法の半過去形が入っているではないか。レベル1のフランスの教科書には、この2つの時制は全く顔を出さず、接続法の半過去にいたっては、レベル2の教科書にも出てこないのである。

また、日本の多くの教科書においては、文法事項はより完全にシステムティックな形で扱われている。たとえば、『パリ東京初飛行』の11課では、代名動詞を学ぶとき、この動詞の持つあらゆるカテゴリー(再帰的、相互的、受動的、本質的)がいつべんに扱われる。こうした複雑な区別はこの段階における学生のレベルに対応していないと思われ、学生がこれらの区別をするのはほとんど不可能で、それどころか混乱を招く可能性も否めない。

フランスのレベル1の教科書は、ごく最初のことから、生きたコミュニケーションの応用練習とその定着を優先するために、文法事項は大事なことだけを教えることにしている。

それに対して、日本の教科書は、応用練習とコミュニケーションの練習を省いて、できるだけ多くの文法事項を詰め込もうとしているように思われる。

日本語とフランス語の構造の違い、さらには概念の違い^(注2)を考慮しても、私には、学生達がこれらの情報をすべて理解するのは困難に思えるし、また、実践に用いるためにそれらを十分に身に付けるのはほとんど不可能のように思える。

2. フランス語の授業の見学

週に3時間2コマの授業は、2人の教師が担当し、それぞれに話しあって一つの教科書を分け持っている。教科書の最初から交互にやっていくか、あるいは文法部分とテキスト部分に分けて扱うかは、ペアによって異なる。

多くの教室には備え付けのテープレコーダーがあって、非常によい音で聞くことができる。備え付けがない場合でも、教師はポータブルのテープレコーダーを使うことができる。

2.1 文法

私が見学したすべてのクラスで(ちょうど代名動

詞の部分だった),文法は日本語で説明された。説明の間,学生は特に参加を求められない。学生が説明をちゃんとわかっているのかどうか,教師が確認しているかどうかはよくわからなかった。学生は,黒板に書いた例や本に出ている文を,たいていみんなと一緒に発音するか,時には一人で発音することを求められる。

テキストと文法が分けられて担当されているクラスでは,文法の説明は一般的に教科書のテキストを例にしたものにはならないようだ。テキストはもう一人の教師の担当となっているから,テキストは,文法の説明にも,その文法をあるコンテキストに置くためにも,練習問題(代名動詞に関する質問,否定文・疑問文にするなど)にも用いられない。

それぞれの課には,4つから6つの例を含む練習問題2つとカセットの録音を書き取る練習1つがあった。教師はそれ以上書く練習を与えてはおらず,口頭練習もほとんど行わない。したがって学生が参加する機会はわずかなものである。たいてい,みんなで声を合わせて読むとき(たとえば動詞の活用など),あるいは何らかの練習問題をするときだけ,参加を求められていた。

2.2 テキストと聴き取り

会話文の全体あるいは一部分を聞いたあとで,学生は全員で,あるいは個別に,文章を一つ一つ,1度か2度繰り返して読む。

語彙と難しい構文はかなりの時間を使って日本語で説明され,教師かときには学生によって,テキスト全体が日本語に訳される。

何人かの教師は,テキストに関してフランス語で質問をしている。学生が参加するのはテキストの文を繰り返すためだけという場合もあるが,その課の語彙を使って,別の文を日本語からフランス語にさせる練習をする教師もいる。

会話文が十分理解されたら,2,3人の少人数のグループにテキストを読ませることもある。すべての学生が個々に口頭練習に参加することができるからである。

テキストの読みの練習は非常に重要な部分を占めている。

2.3 学生

学生達は,普段,受身で非常に行儀がいい。教師が

そうしろといえ,参加もする。寝ているものもいるが,クラスの邪魔をするものはいない。授業時間内で質問をする学生もいないが,個別に授業の後に来るようだ。

3. 文法は手段なのか目的なのか?

フランス語文法を理論的に教えることはもちろん必要である。この教師達によれば,学生達自身がそれにそれを望んでいるという。もちろん先生方のおっしゃることは喜んで信じるが,日本の教育システム自体の中に,こうした安全策をとるよう学生達に求めさせるものがあるのではないかという気がする。

実際,日本の教育システムは本質的に知識の獲得に基づいていて,自主的な参加や,議論や批判にはほとんど場がないように思えた。語学の実践は,それとは逆に,個人的な自己投資を前提としている。

あらかじめ何の話し合いもなく,どんどん大量に取り入れなくてはならない,議論の余地なく完璧に構成された知識として提示される文法は,ある意味では彼らにとって,コミュニケーションの道具である言語自体の学習より安心な学習方法であるらしい。しかし,この文法をちゃんと消化する必要がある,果たしてあるのだろうか。

フランスの教科書は応用の練習にバリエーションをつけている。日本の教科書と同じような書く練習は,もっとずっと大量にやる。一つの課での口頭での構文練習は一つのタイプの言い換えに限られている(Le Nouveau Sans FrontièresのMécanismeの部分参照)。さらに既習の構文を違ったシチュエーションで用いる練習などもある(質問に答える,絵を描写する,写真や漫画をもとにお話を自由に語ったり会話を作ったりする等々)。この最後のタイプの練習は,学生がちゃんと学習した構文を自分のものにして,全部自分で構成しなくてはならない文章の中でそれを応用することができることを前提としている。

もちろん,このタイプの練習には時間がかかり,教師に課されている大量の内容とはなかなか両立しない。しかし,より少ない量を学んで,より多く自分のものにしたほうがよくはないだろうか。

クラスの数からしても,口頭のコミュニケーション練習は易しくはない。しかし,教師の側のコントロールは多少甘くなるとしても,少人数のグループ練習は常に可能である。実際にこのシステムを取

り入れている教師もいる。

フランス語が死語と見なされているような気がしたこともあった。言語構造は詳細に分析されているが、一度説明されたあとは、ほかの意味単位を創造するために学生がそれを使うことはないのである。

私の思うに、文法学習というのは、言語の機能を理解する一つの方法であって、したがって、言説を作るのに必要な道具である。道具というものは、何かを作るために使われる使命があって、方法ではあるが、決して目的ではあり得ない。言語における文法も同じ役割だ。いったん道具の機能を理解したら、次の段階の作業では、学生自身でそれを使わなくてはならないだろう。

4. コミュニケーション能力の獲得に向けて

フランス語は生きた言葉である。使うべきではないのだろうか。

ほとんどの日本の教科書では、練習問題の指示は日本語で与えられ、文には時に日本語訳さえついている。フランスで、英語やそれ以外の言葉をフランス人の学生に教えるために用いられている教科書と比べると、フランスのものは、一般的にすべて学習する言語で書かれていることがわかる。何週間か使えば、学生はこうした指示にも慣れ、それは彼らの獲得した知識の一部となる。

同様に、口頭でも、教師はフランス語を使うことが望ましいと言えるだろう。それは、教える対象としてのフランス語、つまり学科という特別な枠組みの中でのフランス語というだけではなく、可能であれば、授業の流れの中で用いられるフランス語という意味においてである。

語学教室では、たくさんの言葉や表現が繰り返し用いられる。たとえば、おはよう、さようなら、また来週、聞いてください、繰り返してください、答えましょう、練習問題1、2、あなたの番ですよ、いいですね、それは違います、注意して、わかりますか？何ですか？などである。それらをフランス語でいったらどうだろうか。そうすれば、教師がその言語を、より現実生活の一部にしていることが想像できるだろうし、またそのことから、本当のコミュニケーションの価値をその言語に与えることができるだろう。見学したうち、一人の教師がフランス語で話しかけていたのに気づいたが、それによって、その教師はフラ

ンス語がコミュニケーションの手段であることを証明しているのである。

フランス語の授業においては、学生達は全員であるいは個人的に、書かれたテキストを読まされる。この練習は発音の上では興味深い、自己投資はたいして必要とせず、言語を考察する努力も要しない。コミュニケーション中心のメソッドの目的は、学生達に、言語の機能をより良く理解しそれを身につけるようなやり方で、自分自身で言説を構成せざるをえない言語行為の数を増やすことにある。間違いも学習の一部分であるから、学生も教師も、それを恐れてはならない。

フランス語の学習はもちろん、日本では英語に比べて学習者数は少ない。一方、日本の学校教育で必修となっている英語の学習を見ると、外国語に関して、教育システムが直面している困難が明らかになる。札幌でも新潟でも、6年の必修授業を受けているにも関わらず、学生達が、口頭英語を理解するのに、英語で自己表現をするのにも、非常な困難があることに気がついた。書くほうの力は多分もっとよいだろうが、それにしても辞書に頼りすぎている。そのことから考えるに、教育システム自体が、多分、ほかの教科のように教えることはできない語学教育の特異性を考慮に入れていないのではないかという感想を持った。

5. どのような目的に、どのような手段を？

一つの言語を学ぶということの最初の目的は、話す場合でも、読む場合でも、その言語を理解し、次に自己表現にその言語を使うことができるということである。その目的が3セメスターの教育で全面的に達成されるなどということとはあり得ないのは明白だ。

一つの言語を学ぶ2つ目の目的は、おそらく、もう一つの文化へのかけ橋、もう少し広げて言えば、もう一つの別の思考形態へのかけ橋だろう。

言語構造は、それをを用いるものの思考形態を非常によく表わす。たとえば、日本語で、文が肯定文であれ否定文であれ、動詞で終わるのは面白いと思う。動詞が最後にしか表れないことで、真意は最後にしか来ず、そのため相手が途中で口を挟むのを禁ずるからである。礼儀がほとんど芸術の域に達している国で、文の構造が関係していないということはないだろう。フランス語では、逆に、フランス語の構造の関

係で、話者が文を終える前に、会話の流れを切ることなく遮ることができるということがある。一言で言って、言語は、その言語が発達した社会における優先順位を表わしているのである。たとえば、日本語において、礼儀に結びついた形式の重要性とか、ラテン系言語における、数多い限定詞が示す、面倒な決まりなどもそうだ。

学習の目的が何であれ、堅固な土台を立てるに越したことはない。そのためには、最初に、当面本質的ではない点に関して選択をし、扱わないものとする必要がある。その点、私が見た日本の教科書は、十分選択的とは思えない。完全でありたいと思うがあまり、簡潔になっていてさえ困難な学習を、むやみに重いものにしていく。情報過多は、一般的に学習者を惑わせ、その結果、利益にならない方向に導く。

到達目標に関して、もっとつつましくてもいいのではないだろうか。多分、そうすれば、意外により良い結果をもたらす、より良いコミュニケーション力がつくかもしれない。

実際、もし教師が難しい文法を細かいところまで説明するのに長い時間をかけなかったら、学生達に、外国語だけでなく、よい学習方法の構築に向けて、本質的な基礎の構造を練習させる十分な時間があるかもしれないではないか。今日、外国語の実践は、書くのも話すのも、理解とより良い知識の定着の方法とされている。

フランスでは、初心者のための外国語としてのフランス語のクラスで用いられる唯一の言語はもちろんフランス語である。したがって、どんな複雑な説明も禁じられている。学習者は、一連の練習問題や初歩的な説明から言語構造を理解するために、個人的な努力をしなければならない。さらに、デッサンや、絵によるシチュエーション把握、マイムなどから、語彙

を理解する努力をしなくてはならない。その点で、フランスの教科書では、絵は口頭表現のもとになるものとして、非常に多く用いられているのに、日本の教科書においては、絵があまり重要ではないようだということに気がついた。理解の過程の中で参加を求められて、学習者はもう観客ではなく、自分の学習の構築に参加するのである。

もちろん、教師が信ずるかぎり、あらゆる学習テクニックは良い結果をもたらさうし、語学を学ぶのに奇跡の方法などは残念ながら存在しない。しかしながら、フランスで一般に用いられているコミュニケーション・メソッドは、外国人にフランス語を教えるときも、フランスの中学・高校で生徒達に外国語を教えるときにも、過去に用いられたいかなるメソッドよりも良い結果をもたらしているように思われる。

結論として、フランス語も英語も、多分ほかの外国語も、日本の外国語教育全体が、考え直されてしかるべきだと思われる。というのは、学習テクニックが言語自体に緊密に結びついてはいないからだ。

教え慣れているのとは違った環境における私の母語の教育について、考える機会を与え、フランス語の教育が会う問題を新たな光のもとに見つめる機会を与えてくださり、私を快くクラスに迎え入れてくれた先生方に心より感謝する。

(翻訳：長野 督)

注

1. 北大では、毎年3種類ほどの教科書を選別して、担当教官がその中から選ぶシステムをとっている。
2. 例をあげると、フランス語の過去形は3つ、あるいは書き言葉も入れれば5つであるが、それは日本語のシステムと非常に異なっている。

<後記> 感想は、ごらんのように、日本の語学教育全般にとって辛口のものだが、問題は、まさに彼女がいつているように、どのような条件下で何を目標として教える(学ぶ)かにある。

フランスの語学学校は、週15時間、1年を最低の期間に設定してプログラムを立てている。日常に使われる表現を主体とした、コミュニケーション中心の授業である。少人数クラスであるのはいうまでもない。

一方、日本の学校教育のシステムの中では、中・高・大を通じて、この環境は決して望めない。また、現実問題として、会話能力ばかりでなく、資料などの書かれたテキストの意味をきちんと取り取ることも、英語を始めとした外国語教育の目的のかなり重要な部分を占めている。そ

の場合, Barfétyさんが本論で大学の教科書と比較対照しているフランスのレベル1の教科書では, 全く不十分である。その上に, これほど体系の異なる言語を母国語としている日本人は, スペイン人やイタリア人とは最初から語彙の面で多大なハンデをおっており, 一般向けと言いながら, やはりいちばんニーズのあるスペイン, イタリア人を対象に作られたフランス製の教科書を使った場合, 一般的に2~3倍の時間がかかることもわかっている。

というようなわけで, 文法に関するコメントや, コミュニケーションの練習などに関しては, 一理あるとはいえ, フランスの語学学校とは全く状況が異なり, 時間, クラス人数その他さまざまな条件に縛られている現場のものとしては 痛しかゆしというのが本音であろう。

最後に, 諸事情から, 原稿を載せるための手続きなどの労を取ってくださった理学部の渡辺暉夫教授に感謝の意を表します。

(長野 督)